
聖夜の出会い

幸守舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜の出会い

【Nコード】

N7003Z

【作者名】

幸守舞

【あらすじ】

始めて彼と過ごすイヴ。楽しみにしていたはずなのに、早くに着いてしまった待ち合わせ場所で見たのは、彼のキスシーン。

問い詰める事もできずに逃げ出した末に辿り着いた公園は、恋人たちで溢れ返っていて――。

「そんなに溜め息ばかり吐いてると幸せ、逃げちゃうよ？」

突き付けられた現実に幾度となく溜め息を吐く私の耳を優しく甘い声が叩いた。

幸せー溜め息Ⅱ出会い？

「はぁ……」

白く染まった溜め息が足の間に虚しく落ちた。今日で何度目の溜め息だろうか……ふと思ったが、考えるのも、数えるのも、馬鹿らしいほど私は溜め息を零していた。

「はぁ……」

ほら、また一つ。

今日はクリスマススイブなのに私は一人で公園のベンチに座っている。周りを見回せば……。

「はぁ……」

溜め息を吐きたくなる光景で溢れ返っている。

（何で、こうなっちゃったんだろう……）

本当は私だって一人じゃなかった。

——今さっきまでは。

思い出すだけで涙が出そうになる。

「はぁ……」

震える目蓋をぎゅっと閉じて溜め息と一緒に涙を止めた。

（あんな人の為に、私が泣く必要なんて、ない）

それでも溢れてくるのは、待ち合わせをしていた彼が、他の女とキスをしているところ。彼は、私に気付いていない様子だった。でも私は――。

何も知らないフリをすれば良かったのか、彼を問いただせば良かったのか……。結局どちらも出来なくて、私は待ち合わせ場所から逃げるように立ち去った。

「はあ……」

さっきからずっと彼からの電話で携帯が震えている。私はそれを鞆の中に押し込んで見ないフリ、聞かないフリ。

きつと別れる事になるだろう。待ち合わせをすっぱかし、電話にも出ない、そんな女と付き合い続けてくれるわけがない。

（――それにあんな人、こっちから願ひ下げよっ）

そう、胸中で呟いてみても、心に広がる黒い靄は一向に晴てくれない。

付き合い始めてまだ三ヶ月も満たないというのに、私の心はすっかり彼に奪われていたのだ。だからあんなシーンを見ても尚、私は彼への怒りを表せずにした。

（私って、どうしようもないみたい……）

何も知らないフリをして付き合い合っていけるほど、器用じゃないのは自分が一番わかってる。なのに――。

（私は、彼を諦められないでいる……）

せめて鞆の中で震えている携帯に出て一言“さよなら”と、告げる勇気があればどれだけよかっただろう。

「はぁ……」

「そんなに溜め息ばかり吐いてると幸せ、逃げちゃうよ？」

「——え？」

突然、本日幾度目かわからない溜め息を零した私の耳を優しく甘い声が叩いた。はっとして顔上げると、ふわふわと笑った青年の瞳とぶつかり——

「——っ！」

刹那、ドキリと胸が高鳴る音がはっきりと聞こえてしまった。

「し、幸せが逃げるって、そんなの迷信みたいなものでしょ？」

私は胸の高鳴りを誤魔化すように早口に捲し立てた。

「そんな事ないって、俺は思うんだけどなぁ……」

悲しそうに喋る彼に私は聞きたくなってしまった。

「……溜め息で幸せ逃げた経験あるの？」

「うん——。実はさ、彼女が待ち合わせ時間をよく破る人で、今日も遅刻してたんだ。あんまり遅いんで溜め息吐いたんだよ。またかって。そしたら、溜め息を吐いた先に彼女が居たんだ。知らない男

とキスしてた――」

私は凄く驚いていた。彼の話が自分と重なっていたから――。

「君も、そうだったりする？」

彼の言葉に私は息を飲んだ。

そんな私を余所に彼は話続ける。

「あの時、彼女に何してんだっ！　て言おうとしたら、君が真っ青な顔して俺の前を走って行くから気になって追っ掛けて来たんだ。――もしかしたら、って思って。でも普通“もしかしたら”ってだけで追っ掛けた上に話し掛けたりしないよね、今更だけど……」

そう彼は後ろ手に髪を触りながら照れ臭そうに言った。

私は呆気にと取られて彼の顔をまじまじ見つめてしまう。

――確かに、目の前の青年が言うように“もしかしたら”で見ず知らずの自分を追って来たなんて馬鹿げてる。

でも――、今の私には寧ろ有り難かった。

「“もしかしたら”じゃなくて、その通りなんだけどね……」

私は少しでも気を紛らわせたくて、彼と色んな事を話した。

彼氏の浮気癖の事、わがままな人だという事、変な仕草を格好良いと思ってる事、ナルシスト気味である事……ect、ect、ect。

それから、彼の彼女の事を聞いた。

時間にルーズな事、化粧が濃い事、無闇に体をくっつけてくるのが実は鬱陶しい事、他の男に色々貢がせている事……ect、ect、ect。

『……………ぷっ！！』

日頃の鬱憤を吐き出すように話し合えば、無性に可笑しくなって私と彼は同時に吹き出した。

ひとしきり笑った後、目尻に溜まった涙を拭う。

「お互い、何で付き合ってるんだろうね……………」

「……………確かに」

私達は再び顔を見合わせて笑った。

しばらくして笑いを収めた私は、座っていたベンチから立ち上がった。軽くお尻を叩き「んっ」と伸びをする。

「話、聞いてくれてありがとう。何だかスッキリした」

私は同じく立ち上がっていた彼に笑顔を向ければ、柔らかい笑顔を返される。だけど直ぐその笑顔は消え、なんとも言えない微妙な表情^おに変わる。

「えーっと……………君はこれからどうするの？」

先程までと違う彼の様子に（ん？）と内心、首を傾げつつも答える。

「帰ろうかなって思ってたけど……………」

二人で過ごすつもりでいたのに、今更一人で街を歩くななんて惨めだ。

そう告げれば彼は少しだけ視線を宙に彷徨わせ、引き結んでいた唇を開く。

「……あのさ、よかったら……その、今日一日、一緒に回らない？」

私は言われた事に驚いて、じっと彼を見詰めてしまった。

「会ったばかりで、こんな事言うのもアレなんだけど……。なんて言うか、悲しい思いをしたもの同士と言うか……」

私が向けた視線の所為か、焦ったように言い繕う彼の姿がおかしくて、くすりと収まっていた笑いが再び零れ出す。

「私——千紗、浅海千紗。今日一日、よろしくお願いします！」

だから私は了承を示す言葉を彼に返す。いつもの自分ではあり得ないほど大胆だ、と思いながら。

「あつ、俺は修一、葛城修一。こちらこそよろしく！」

電信柱十物思いⅡゆでダコ

「それではどこに行きたいところがありますか？ お姫様？」

公園を出ると彼は先程とは打って変わった恭しい態度でそんな事を言うので、私は口元に笑みが浮かぶのを止められなかった。

「私の行きたいところかあ……。うーん……。よしっ！」

そう言って顔を上げると、ふわふわと笑ってこちらを眺めている彼の瞳とぶつかり治まりかけてた胸の鼓動が再びドキリと大きく鳴った。

その胸の鼓動に後押しされるように私は早口かつ叫ぶように言い切った。

「えっと、あのね、私、あんまりこの辺のこと知らないの。だから、その、修一くんにお任せするっ！」

ちよつとあたふたしてた私に彼はオーケーと笑って先に歩き出した。私はその背中をぼんやり眺めながら思う。

（私、どうしちゃったのかなあ……）

何でこんなに苦しいのだろう？

出会ってまだ数分しか経っていないのに……。

——ゴツツ！

「痛っ！？ な、何！？」

「大丈夫？　千紗？」

慌てふためく私の鼻を甘い香りがくすぐった。

そして気が付くと数センチ先に私の顔を覗き込む彼のやわらかい瞳が――。

「――っ！！」

私は声の無い悲鳴を上げた。

「ははっ。千紗って可愛いね」

彼の吐息が前髪を揺らしてそっと離れた。

私はおでこを片手で押さえつつ目の前の電信柱を蹴り付けた。

そう、私は間抜けにも考え事に夢中になって電信柱にぶつかったのだ。

（穴があつたら入りたいっ！）

今ならゆでダコにも勝てる。そんなくだらない事を本気で考えながら、私は熱く火照った顔を俯かせた。

「ねえ、千紗。……手、繋ごうか」

「え……？　……………ええ！？」

その唐突な物言いに私は弾かれるように顔を上げ、そのまま照れ臭そうに片手を差し出している彼を茫然と眺めた。

「そんなに驚かなくても……」

彼は差し出している手と反対の手で頭を掻きながら続けた。

「だって千紗、ほっといたら色んな所にぶつかりそうだから」

「それは――」

手を繋ごう発言でどこかに飛んでいったはずのゆでダコが再び顔に舞い戻ったのを感じながら、私は何か言わなくてはと必死になった。

「ははっ。やっぱり千紗って可愛いね」

そう言いながら彼は私の手を優しく、けれど強く掴み、そして引いた。

「きゃ!?!」

その強さに思わずよろめき私は小さな悲鳴と共に彼の腕の中に倒れこんだ。

そして、そんな私の耳元で彼は低く囁く。

「どうせぶつかるなら俺にしてよ」

はい。と素直に答えたくなるような甘い囁きだった。

「じゃあ、行こうか」

彼は何事も無かったかのように私を腕の中から解放すると歩き出

した。もちろん、その手は握ったままで。

「後さ“くん”とか付けなくていいよ、俺の名前。……似合わないし」

私の手を引き先を歩く彼の表情は見えないけれど、空いている片手は頭を掻いていて、それは彼が照れている時の仕草なのだど唐突に気が付いた。

だからか私は彼の顔を見てやろうと小走りに彼の前に回り込んだ。

「ぷ、あははっ」

私よりほんの少し高い位置にある彼の表情に思わず吹き出ししまった。

「顔、真っ赤！」

私のゆでダコよりもきつと赤いに違いない。そんな事がたまらなく嬉しくて私は彼の手をぎゅっと握り締めた。

彼は顔を赤らめたまま視線を明後日の方に逃しているが、私の手はしっかりと握り返してくれた。

（幸せってこんな感じなのかな……）

そう思えるほど私は満ち足りた気分だった。

「着いたよ」

彼の一声ではっと我に返った私は目の前に広がる光景に息を呑んだ。

これは――。

「ゲーセン……?」

「そうだよ」

彼はのんびりと私の疑問を肯定してくれた。

「なんで――ゲーセン?」

せっかくロマンチックな気分浸ってたのに、これじゃ台無しじゃないのっ!? 等とぶつぶつ呟く私を気にする素振りさえ見せず彼は私の手を引いてずんずん入っていた。

「ふふふ、いいわ。こうなったら……」

私の怪しい呟きは、ゲームセンターに流れる大音量の音楽に攪さらわ
れて彼の耳に届く事はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7003z/>

聖夜の出会い

2011年12月24日08時49分発行